Tsukuba Psychological Research
2009, **38**, 89-96

幼児をもつ母親の子育ての悩みに関する被援助志向性の探索的検討

―身近な他者と専門機関に相談しにくい理由の分析―

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科

本田　真大・三鉡　泰代・八越　　忍・西澤千枝美

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　新井邦二郎・濱口　佳和

An explorative study of help-seeking preferences in mothers relating to their child's problems

Masahiro Honda, Yasuyo Sanko, Shinobu Yakoshi, Chiemi Nishizawa, Kunijiro Arai and Yoshikazu Hamaguchi (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the help-seeking preferences of mothers relating to their child's problems. The participants were 150 mothers who are bringing up children between the ages of three to six. They were asked to complete a questionnaire and the results suggest the following points. First, in the preferences to seek help from familiar others, there are two sub-concepts relating to "worry about own interpersonal relationships" and "fearfulness about negative effects for both the mother and the child". Second, the preference to seek help from formal services also includes two sub-concepts relating to a "vague sense of resistance in depending on unknown others" and "concrete worries". The implications of this study are discussed.

Key words: help-seeking preferences, mothers, infants, parenting

問題と目的

内閣府（2006）の「少子高齢化に関する国際意識調査」によれば，調査対象者1115名のうち約15％が育児に楽しさよりも辛さを感じており，子育て中の女性625名を対象とした「子育てに関する意識調査」（こども未来財団，2004）では約80％の母親が子育てに自信をなくした経験があると報告されている。これらのことから，子育てをしている現代の母親は多くの援助を必要としていると言えよう。そこで，援助者は子育てで悩んでいる母親が援助を求めやすい状況や環境を理解していくことが重要であると考えられる。

母親が子育ての悩みについて援助を求めたり相談したりする現象は援助要請行動ととらえることができる。援助要請行動は，「情動的または行動的問題を解決する目的でメンタルヘルスサービスや他のフォーマルまたはインフォーマルなサポート資源に援助を求めること」と定義される（Srebnik, Cause, & Baydar, 1996）。そして，この援助要請行動に影響を与える要因の一つに被援助志向性がある（水野・石隈，1999）。本研究では母親の子育ての悩みに関する被援助志向性に焦点を当てて検討する。

被援助志向性は「個人が，情緒的，行動的問題および現実生活における中心的な問題で，カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家，教師など

の職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」と定義される（水野・石隈，1999）。これまでに，いくつかの研究によって被援助志向性の下位概念が検討されている。例えば，田村・石隈（2006）は中学校教師の職業上の悩みに関する特性的な被援助志向性を測定する尺度を開発し，下位尺度として「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」「被援助に対する肯定的態度」の2つを見出している。水野（2007）は中学生を対象とし，スクールカウンセラーに対する被援助志向性を測定する尺度を作成した。そして，下位尺度として「援助の肯定的側面」「相談スキル」「遠慮の少なさ」「相談に対する懸念・抵抗感の低さ」「自己開示への恐れの無さ」の5つを挙げている。

保護者の子育ての悩みに関する被援助志向性の下位概念に示唆を与える研究として，湯浅・櫻田・小林（2006）は3歳未満の子どもの母親を対象とし，保健師に対する援助要請の抵抗（被援助バリア）には「相談への信頼」「遠慮」「侵害性」の3つの側面があると報告している。また，飯田（2006）は中学生の保護者（父親，母親）を対象とし，専門機関への来談に対する態度尺度を作成した。その結果，下位尺度として「専門機関に対する不信感」「親としての脅威」「子どもへの影響」の3つを見出している。

このように，各研究によって調査対象者の特徴は異なるものの，被援助志向性の様々な下位概念が報告されている。しかし，幼児をもつ母親を対象とした被援助志向性の下位概念を検討した研究はほとんど行われていない。保育所・幼稚園の保育者の多くが子育て支援の必要性を認識していることからも（中津，2007），幼児期の子どもに対する支援には保護者が周囲の他者や保育者，専門家と協働することがより望ましいであろう。そのような協働を促進する上で，保護者の被援助志向性をよりよく理解することは重要であると考えられる。

以上より本研究では，幼児をもつ母親の被援助志向性を探索的に検討することを目的とする。

方　法

調査対象者：関東の3つの公立幼稚園に通う幼児の母親375名。

調査時期：2008年7月に実施された。

実施方法：個別記入方式の質問紙を用いた留置法調査であった。具体的には，一部ずつ封筒に入れられた質問紙を幼稚園を通して母親に配布し，所定の期日までに回答し，封筒を厳封して再び幼稚園に返却するという方法であった。回答は無記名であり，調査に同意が得られた母親のみに調査への協力が求められた。

調査内容[1)]：

(1) フェイスシート：母親の年齢（1：「20歳未満」，2：「20代」，3：「30代」，4：「40代」，5：「50歳以上」），職業（1：「勤め（フルタイム）」，2：「勤め（パートタイム）」，3：「専業主婦」，4：「その他」），同居家族（「夫」，「実父」，「実母」，「義父」，「義母」，「その他の人」から複数回答形式），子どもの人数，年齢，性別について尋ねた。子どもが2人以上いる場合は，子ども全員の年齢と性別を記入した上で，3歳以上の子どものうち年齢の低い方の子どもについて回答するように求めた。

(2) 被援助志向性：身近な他者と専門機関に対する被援助志向性を自由記述方式で尋ねた。教示文は水野（2007）を参考に，「あなたが子どものことや子育てについて悩み，自分一人では解決できない場合，それを身近な人（夫，実母，友人など）や専門機関（保健所・保健センター，医療機関，児童相談所，大学・個人の運営する相談室など）に助けを求めにくいところ，相談しにくいところがあるとしたら，それはどんなことでしょうか？ご自由にお書き下さい。」とした。記述欄は，「身近な人に助けを求めにくい，相談しにくい所」と「専門機関に助けを求めにくい，相談しにくい所」の2つを設け，個別に回答を記述するように求められた。

結　果

調査対象者375名のうち150名から回答が得られた。回収率は40.0％であった。調査協力者の特徴をTable 1 ～ Table 3に示した。

(1) 身近な他者に対する被援助志向性の検討
自由記述の分類

71名から得られた身近な他者に対する被援助志向性の自由記述計86件を類似した内容ごとに分類した。分類は発達臨床心理学を専攻する大学院生4名の話し合いによって行われた。4名のうち2名は母子並行面接を主とする大学相談室で母親面接を担当した経験があり，他の2名は幼児をもつ母親に関する研究を中心的に行っていたため，この4名によって得られた分類結果はある程度妥当であると判断された。分類されたカテゴリーと記述例をTable 4に

1）本研究ではこれらの他に複数の尺度も同時に実施されたが，本研究の分析には用いられなかった。

示した。

身近な他者に対する被援助志向性の検討

身近な他者に対する被援助志向性を検討するために数量化理論第Ⅲ類（以下，数量化Ⅲ類）による分析を行った。まず，「その他」を除く分類されたカテゴリーに該当する記述を行った場合には2，記述がなかった場合には1として数値に変換した。次に，カテゴリースコアの数量1・2を算出し，「記述あり」カテゴリーを2次元平面上に布置した（Fig. 1）。項目間のまとまりを明らかにするために，各項目の数量1・2のカテゴリースコアに対してクラスター分析（Ward法）を行い，Fig. 1に表記した。

第1象限，第2象限と第3象限の成分1の負の絶対値が比較的大きい位置には，「理解されない懸念」「相手の不在」「自力解決志向」「遠慮」「日頃の人間関係」「悩み軽視の懸念」が布置された。この領域は母親が安心して援助を求めることができる相手がいない，あるいは援助を求めたとしても相手が十分には応えてくれないという内容であると解釈されたため，『関係性に対する懸念』と命名された。

第3象限の成分1の負の絶対値が比較的小さい位置と第4象限には，「良くない噂の懸念」「解決の期待の低さ」「母親非難の懸念」が布置された。この領域は相談することによって生じる悪影響を懸念している内容であると解釈され，『母子への悪影響の恐れ』と命名された。

(2) 専門機関に対する被援助志向性の検討

自由記述の分類

87名から得られた専門機関に対する被援助志向性の自由記述計109件を類似した内容ごとに分類した。分類の方法は，身近な他者に対する被援助志向性の自由記述の分類方法と同じであった。分類されたカテゴリーと記述例をTable 5に示した。

専門機関に対する被援助志向性の検討

専門機関に対する被援助志向性を検討するために数量化Ⅲ類による分析を行った。分析の手続きは，身近な他者に対する被援助志向性の分析と同様であった（Fig. 2）。

第1象限の成分2の正の絶対値が比較的小さい位置には「母親非難の懸念」「対応への不信感」，第3象限には「利用しづらさ」，第4象限には「自力解決志向」「秘密漏洩の心配」「伝える自信のなさ」が布置された。この領域は母親が専門機関に対して抱く細分化された具体的な心配事と解釈され，『具体的な心配事』と命名された。

第1象限の成分2の正の絶対値が比較的大きい位置と第2象限には，「相手の情報不足」「期待の低さ」「敷居の高さ」が布置された。この領域は漠然とした抵抗感を示し，またこれらのカテゴリーは母

Table 1　本研究における調査協力者（母親）の特徴

母親の年齢	人数	母親の職業	人数
20歳未満	0	勤め（フルタイム）	12
20代	8	勤め(パートタイム)	25
30代	115	専業主婦	106
40代	26	自営業	4
50歳以上	0	その他	2
無回答	1	無回答	1

Table 3　本研究における調査協力者の子ども以外の同居家族の特徴

	子ども以外の同居家族		
	同居	別居	無回答
夫	145	3	2
実夫	7	142	1
実母	6	143	1
義父	17	132	1
義母	22	127	1
その他の人	12	137	1

Table 2　本研究において調査協力者が回答する際に対象とした子ども（対象児）の特徴

子どものきょうだい数	人数	対象児の出生順位	人数	対象児の年齢	人数	対象児の性別	人数
1人	30	第1子	60	3歳	33	男児	78
2人	78	第2子	63	4歳	42	女児	66
3人	35	第3子	23	5歳	61	無回答	6
4人以上	5	第4子以上	2	6歳	11		
無回答	2	無回答	2	無回答	3		

Table 4　身近な他者に相談しにくい理由に関するカテゴリーと記述例（N = 71）

カテゴリー	人数	回答率（%）	記述例
良くない噂の懸念	16	22.54	身近な人に家のことを話すと他の人にも伝わっていそうで怖くていえない（No.22）
			周りの人に相談するとかわいそうと思われるのが嫌。噂が広まる（No.109）
母親非難の懸念	11	15.49	母親のせいにされるのではないかという思いがある（No.94）
			子育てを信用して任せてくれなくなる（No.46）
遠慮	11	15.49	自分の母に相談すると心配するばかりで気を使わせて悪いと思う（No.110）
			相手も余裕がないと感じられるので相談しづらい（No.103）
悩み軽視の懸念	11	15.49	相談しても「気にしないこと」で片付けられる（No.25）
			夫や母親に相談しても安易に「大丈夫」,「問題ない」と言われる（No.98）
理解されない懸念	10	14.08	子どもの性別や人数が違うので理解してもらえないと思う（No.113）
			子どもに対する考え方が人によってまちまちである（No.142）
解決の期待の低さ	6	8.45	話を聞いてもらうだけ，解決策は見出せないし期待もしていない（No.61）
			結局解決しなそうで愚痴をこぼすだけになってしまう。解決しないなら時間の無駄な気がする（No.99）
自力解決志向	5	7.04	相談しても結局自分で解決するしかない（No.93）
			相談しても解決するのは自分とその家族である（No.85）
日頃の人間関係	5	7.04	子ども同士，親同士の人間関係だったりするので，近所の人にはなかなか相談しづらい（No.32）
			友達の子どもと相談したい子が仲良しのときは相談しないかも（No.82）
相手の不在	4	5.63	身近な人が頼れない体調や性格であるとき，大まかに話すことしかできない（No.17）
			本当は夫に少しでもいいから話したいと思うけど，あまり協力的ではないので何も話せない（No.39）
その他	7	9.86	夫にはなんでも相談できる（No.38）
			幸いものすごく子どものことに関して誰かに相談するほど悩んだことはありません（No.50）

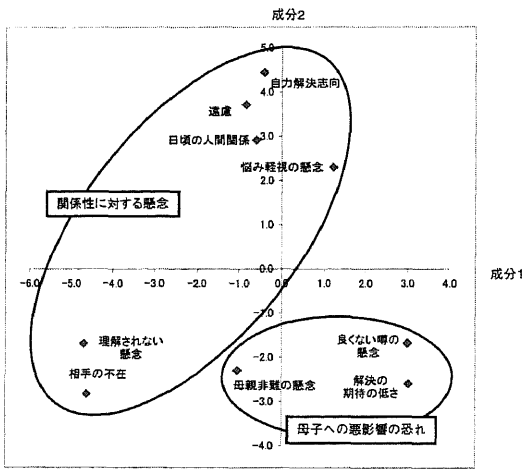

Fig. 1　身近な他者に相談しにくい理由同士の関連

親が専門機関について分からないことに由来すると解釈されたため，『未知による漠然とした抵抗感』と命名された。

考　察

本研究のまとめ

本研究の目的は幼児をもつ母親の被援助志向性を探索的に検討することであった。自由記述から得られた内容を分類し，数量化Ⅲ類によって分析した結果，身近な他者に対する被援助志向性として『関係性に対する懸念』『母子への悪影響の恐れ』，専門機関に対する被援助志向性として『具体的な心配事』『未知による漠然とした抵抗感』という下位概念の存在が示唆された。

総合考察

本研究で得られた身近な他者に対する被援助志向性の下位概念と先行研究の被援助志向性ならびに類縁概念との対応を Table 6 に示した。援助を求めることによる母子への影響を示す概念として，湯浅他（2006）は「侵害性」を挙げており，飯田（2006）は「親としての脅威」「子どもへの影響」を見出している。本研究で得られた『母子への悪影響の恐れ』はこれらの先行研究と一致すると考えられる。一方，湯浅他（2006），飯田（2006）はいずれも専門家を援助要請の相手として想定しているのに対し，本研究では身近な他者への被援助志向性を検討した。本研究で得られた『関係性に対する懸念』と

Table 5　専門機関に相談しにくい理由に関するカテゴリーと記述例（N = 87）

カテゴリー	人数	回答率（%）	記述例
利用しづらさ	23	26.44	わざわざ予約をしていくヒマがない。子育て疲れで電話するのも面倒（No.52）
			どういう状態のときはどこの相談機関に相談すればいいのか，というのが分かりづらい（No.60）
期待の低さ	18	20.69	一般論でしか話してもらえない（No.27）
			画一的に判断されるのでは，と思うとなかなか行く気になれない（No.60）
敷居の高さ	18	20.69	どのくらいのことから専門機関に相談して良いのか分からないので相談しにくい（No.139）
			本格的にこんなに大変なことになっているのか…という壁を自分の中に感じてしり込みしてしまう（No.59）
対応への不信感	14	16.09	どこまで親身になってもらえるか不安もあるので相談しにくい（No.17）
			他人事で済まされそう（No.94）
相手の情報不足	10	11.49	相談に乗ってくれる方がどういう性格の方なのか，気になる（No.57）
			子どもを育てたことがない人に相談はできない（No.93）
伝える自信のなさ	8	9.20	普段の様子をうまく伝えることができるか心配（No.69）
			相談するにも身近でないと環境，情報など正確に伝えづらくかえって面倒（No.82）
秘密漏洩の心配	5	5.75	どこで相談事が漏れるか分からない（No.100）
			専門機関では個人の記録が残るので相談しにくい（No.86）
母親非難の懸念	4	4.60	自分の子育てが全て否定されそうで恐い（No.48）
			子どものことで相談しても自分の子育てを否定されるので相談しにくい（No.25）
自力解決志向	3	3.45	自分の子どものことは自分で解決しなければならないと思う（No.93）
			結局，自分自身がしっかりしなければならない（No.1）
その他	6	6.90	必要だと感じたら相談すると思います（No.62）
			そこまで真剣な悩みは今まで経験がない（No.4）

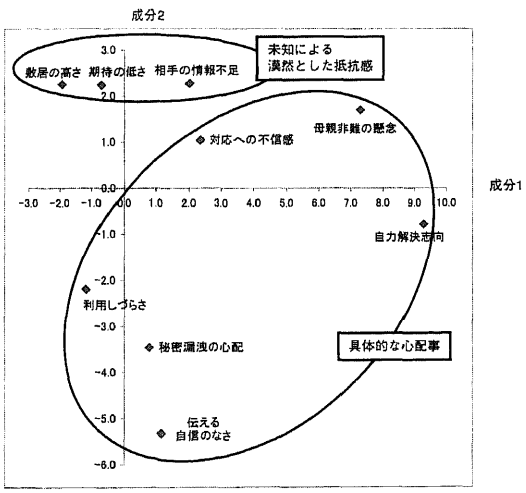

Fig. 2　専門機関に相談しにくい理由同士の関連

いう概念に含まれる「相手の不在」「日頃の人間関係」のカテゴリーは，日常的な人間関係のある相手に援助を求める際に特徴的な被援助志向性の一側面であると推察される。また，専門機関に対する被援助志向性の概念と身近な他者に対する被援助志向性の概念は重複する一方で，それぞれに特徴的な側面も存在する可能性がある。

さらに，『関係性に対する懸念』には「自力解決志向」のカテゴリーが含まれており，「遠慮」「日頃の人間関係」の付近に布置された。このことから，周囲の他者との人間関係に配慮し遠慮することで，子育ての悩みは母親自身が解決すべきという思いを強くし，援助を求めにくくなると推測される。加えて，「理解されない懸念」と「相手の不在」が近くに布置されていた。被援助志向性とソーシャルサポートには正の関連があることから（笠原，2000；水野・石隈，2001；水野・石隈・田村，2003；田村・石隈，2001），悩んだときに頼れる人とのネットワークが小さい母親は相談しても理解してもらえないと考える傾向にあると考えられる。

専門機関に対する被援助志向性には，『具体的な心配事』と『未知による漠然とした抵抗感』の2つがあることが示唆された。本研究で得られた専門機関に対する被援助志向性の構造と先行研究の被援助志向性ならびに類縁概念との対応をTable 7に示した。『具体的な心配事』の「自力解決志向」のカテゴリーは「母親非難の懸念」「対応への不信感」と比較的近い位置にあった。自尊感情が低いほど傷つくことを恐れて援助を求めないという「傷つきやす

Table 6　本研究から得られた身近な他者に対する被援助志向性の下位概念と先行研究の被援助志向性および類縁概念の対応

文献 対象 援助要請相手	本研究 幼児（3～6歳児）の母親 身近な他者	田村・石隈（2006） 中学校教師 中学校教師	水野（2007） 中学生 スクールカウンセラー	湯浅・櫻田・小林（2006） 3歳未満児の母親 保健師	飯田（2006） 中学生の母親 専門機関
下位概念	**関係性に対する懸念**				
	理解されない懸念	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	援助の肯定的側面	相談への信頼	専門機関に対する不信感
	悩み軽視の懸念	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	援助の肯定的側面	相談への信頼	専門機関に対する不信感
	遠慮		遠慮の少なさ	遠慮	
	相手の不在				
	自力解決志向				
	日頃の人間関係				
	母子への悪影響の恐れ				
	良くない噂の懸念	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	相談に対する懸念・抵抗感の低さ	侵害性	子どもへの影響
	解決の期待の低さ	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ		相談への信頼	専門機関に対する不信感
	母親非難の懸念				親としての脅威
本研究で得られた下位概念と対応しない概念		被援助に対する肯定的態度	相談スキル 自己開示への恐れの無さ		

注）先行研究の概念名にはそれぞれの研究で作成された尺度の下位尺度名を用いた。
本研究で分類されたカテゴリーに含まれる記述および先行研究の各下位尺度の項目内容を基に第1著者が対応を示した。

Table 7　本研究から得られた専門機関に対する被援助志向性の下位概念と先行研究の被援助志向性および類縁概念の対応

文献 対象 援助要請相手	本研究 幼児（3～6歳児）の母親 専門機関	田村・石隈（2006） 中学校教師 中学校教師	水野（2007） 中学生 スクールカウンセラー	湯浅・櫻田・小林(2006) 3歳未満児の母親 保健師	飯田（2006） 中学生の母親 専門機関
下位概念	**具体的な心配事**				
	対応への不信感	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	援助の肯定的側面	相談への信頼	専門機関に対する不信感
	秘密漏洩の心配	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	相談に対する懸念・抵抗感の低さ	侵害性	専門機関に対する不信感
	利用しづらさ		遠慮の少なさ	遠慮	
	伝える自信のなさ		相談スキル		
	母親非難の懸念				親としての脅威
	自力解決志向				
	未知による漠然とした抵抗感				
	期待の低さ	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ		相談への信頼	専門機関に対する不信感
	敷居の高さ			遠慮	専門機関に対する不信感
	相手の情報不足		自己開示への恐れの無さ		
本研究で得られた下位概念と対応しない概念		被援助に対する肯定的態度			

注）先行研究の概念名にはそれぞれの研究で作成された尺度の下位尺度名を用いた。
本研究で分類されたカテゴリーに含まれる記述および先行研究の各下位尺度の項目内容を基に第1著者が対応を示した。

さ仮説」(Nadler, 1998) に基づけば，子育ての悩みに苦しんでいる母親は子育てへの非難や不誠実な対応を予期し，母親自身が傷つくことを恐れることで，専門機関に頼らずに自力で解決しようと考える，という心理的な過程の存在が示唆される。『未知による漠然とした抵抗感』に「相手の情報不足」のカテゴリーが含まれていたことから，『未知による漠然とした抵抗感』は，子育てに悩む母親と専門家との間の協働や治療的な人間関係が形成され，継続的に専門家と接することによって次第に薄れていくものであると推察される。

実践への提言

本研究の結果から得られた知見を実践に生かす方法について述べる。専門機関に対する被援助志向性の中で，『具体的な心配事』に対しては専門機関や保育者が専門機関について積極的に情報提供することは母親の専門機関の利用に対する心配を小さくし，被援助志向性を高める一助となろう。しかし，『未知による漠然とした抵抗感』は実際に母親が専門家と出会い，関係を形成する中で解消されていく可能性がある。したがって，母親の被援助志向性を高めるためには母親と専門家の接点を増やす努力が求められる。専門機関の専門家による地域の人を対象とした子育ての講演会や子育て支援教室は母親の被援助志向性を高めるという点においても有効であろう。また，地域の保育者と専門家のネットワークを広げる取り組みによって，保育者から母親に専門家の印象などを直に話してもらうことも可能となり，ひいては母親の被援助志向性を高めることにつながると考えられる。

本研究の限界と課題

最後に本研究の限界と課題を２つ挙げる。第１に，本研究では幼児をもつ母親の子育ての悩みに関する被援助志向性の先駆的な研究として，被援助志向性の下位概念を探索的に検討した。今後は本研究の結果を基に被援助志向性を測定する尺度を開発することで研究知見を蓄積することが期待される。第２に，子育ての悩みの援助要請の意図や行動に影響を与える要因は被援助志向性の他にもいくつか指摘されている。例えば，子どもの問題に対する母親の感情，子どもの性別 (Raviv, Raviv, Edelstein-Dolev, & Silberstein, 2003)，母親の時間的余裕，過去のメンタルヘルスサービスの利用経験 (Owens, Hoagwood, Horwitz, Leaf, Poduska, Kellam, & Ialongo, 2002)，ソーシャルサポートなどである (笠原，2000)。今後はこれらの要因と母親の被援助志向性の関連を検討し，子育て中の母親をよりよく理解することで，サービスを利用する母親の立場から見て利用しやすい子育て支援の方向性を探ることが望まれる。

謝　辞

調査にご協力頂きました幼稚園の先生方ならびに幼児の保護者の皆様に感謝申し上げます。また，本研究の調査を行うにあたり大阪教育大学の水野治久先生にご助言を賜りました。厚くお礼申し上げます。

引用文献

飯田敏晴 (2006)．中学生の保護者における専門機関への来談に対する態度尺度作成の試み　明治学院大学心理学研究科修士論文．

笠原正洋 (2000)．保育者による育児支援：子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から　中村学園研究紀要，32，51-58．

こども未来財団 (2004)．平成15年度子育てに関する意識調査

水野治久 (2007)．中学生が援助を求める時の意識・態度に応じた援助サービスシステムの開発　平成16年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究(c)(1)）研究成果報告書16530423

水野治久・石隈利紀 (1999)．被援助志向性，被援助行動に関する研究の動向　教育心理学研究，47，530-539．

水野治久・石隈利紀 (2001)．アジア系留学生の専門的ヘルパー，役割的ヘルパー，ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連　教育心理学研究，49，137-145．

水野治久・石隈利紀・田村修一 (2003)．中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究　コミュニティ心理学研究，7，35-46．

Nadler, A. (1998). Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help seeking. In Karabenick, S.A. (Ed.), Stragetic help seeking:Implications for learning and teaching. Mahwah:Lawrence Erlbaum Associates. Pp.61-93.

内閣府 (2006)．少子高齢化に関する国際意識調査

中津郁子 (2007)．子育て支援としての相談活動のあり方―保育所・幼稚園の保育者を対象にした質問紙調査から―　小児保健研究，66，46-

Owens, P., Hoagwood, K., Horwitz, S.M., Leaf, P.J., Poduska, J.M., Kellam, S.G. & Ialongo, N.S. (2002). barriers to children's mental

health services. *Journal of American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, **41**, 731-739.

Raviv, A., Raviv, A., Edelstein-Dolev, Y. & Silberstein, O. (2003). the gap between a mother seeking psychological help for her child and for a friend's child. *International Journal of Behavioral Development*, **27**, 329-337.

Srebnik, D., Cause, A.M. & Baydar, N. (1996). Help-seeking pathways for children and Adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, **4**, 210-220.

田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究－バーンアウトとの関連に焦点をあてて－教育心理学研究, **49**, 438-448.

田村修一・石隈利紀 (2006). 中学校教師の被援助志向性に関する研究－状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討－ 教育心理学研究, **54**, 75-89.

湯浅京子・櫻田 淳・小林正幸 (2006). 育児相談の被援助志向性に関する研究－ストレス反応と保健師に対する被援助バリアの視点から－ 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, **2**, 9-18.

(受稿3月23日：受理5月7日)